

「半径20キロメートル」

福島第一原発警戒区域立入規制 男性警察官

私が福島県に派遣されることが決定したのは平成23年7月末のことである。

私自身、東日本大震災の発生から2度派遣され、行方不明者の捜索活動等に当たったが、今回の任務は「原発20キロメートル規制にかかる検問業務」というものだった。

福島県にある福島第一原子力発電所から20キロメートルに設定された避難対象地域、この範囲内に入り出す車両の検問に当たるというのがその内容である。



警戒区域立入規制を行う隊員

当初は放射線に対する知識も無く、またニュースや新聞では原発の事故が国際的に取り上げられていたこともあり、目に見えない放射線というものへの不安を感じたが、だからこそ震災支援活動として大切な業務であるのだと考えた。

機動隊の輸送車両で福島県に向かう途中、過去二度の災害派遣で目の当たりにした悲惨な光景が幾度も頭の中に浮かんだが、いざ活動場所に到着した時、目の前に広がっていたのは記憶の中にある瓦礫の山ではなく、広大な農地であった。

検問場所から辺りを見渡した時、視界に入っているすべてが規制範囲なのだ気付き、その規模の大きさに驚嘆した。そして、今日に映る山々の遙か向こう側までもはや誰一人住んでいないということに、得体の知れない恐怖を感じたのが記憶に残っている。

そんな中、部隊の引き継ぎが終わり、検問が開始された。検問の内容は、市役所が発行した通行許可証を確認し、持ち出し物品等の検査をして通行させるというものであったが、8月の炎天下、気温は35度を超え、設置していた熱中症の危険を示す装置からはアラームが鳴り続けるというとても過酷な環境であった。

しかし、検問場所の前で献花され、涙ながらに手を合わせる被災者の方を目にすると、過去派遣された岩手県や宮城県が思い出され、頑張ろう、と胸が熱くなった。

通過する車両は、原発の方向に向かう電力会社の車や工事車両が多いが、一般の車両は、避難する際に実家に置いてきた車や家財道具を運びだそうとする目的の方が多く、中には持ち出し禁止物品にあたる食べ物や飼い犬等を車に隠して出ようとする人がある。

そういった人には、持ち出し出来ないことを教示して引き返してもらうことになるのだが、住民の方々の事情を考えると、仕方がないとはいえ苦々しい気持ちになった。

地震による恐怖と被害、そして放射性物質による恐怖、汚染食物に対する恐怖、そして住

む土地を離れいつ帰れるかわからないという不安。

自分がその状況下に置かれたとしたら、その辛さはどれほどか想像すると、「通してほしい」という住民の方々の気持ちが伝わってくるのだった。

実際に、米袋を隠して持ちだそうとしていた住民と揉めることもあった。

「原発事故の前に出来た米です、食べ物が無いと生活出来ない」と言われ、1時間以上も説得が続き、結果的に運び出しを諦め引き返して頂いたが、涙ながらに訴える姿からは避難生活の困難さが伝わってきた。

現地で会う人はほとんどが被災者である。今回の検問についても、通行を求める人は被災者であるということを念頭に置き、規制する理由や条件、迂回路等について正しく説明し、相手に納得してもらえるよう努めなければならないと感じた。

私の派遣期間は2週間程で終了したが、福島では未だ20キロメートルの通行規制は解かれてはいない。現在でも、交代で各県の警察官が検問を行っているのである。

漏出した放射性物質の処理、避難所の運営管理、破壊された原子力発電所の修復作業等、各関係機関がそれぞれの役割を懸命に果たしている。

一人の警察官として関われることはその被害に対して微かなものかもしれないが、組織の担う役割を一生懸命に果たし、積み重ねていくことで、被災地に生きる人たちを応援し、少しでも力になれるようこれからも努力していきたい。



夜間規制を行う隊員